

第24回秀麗富嶽十二景写真コンテスト

総 評

写真というものは面白いもので、その撮る人によって内容・表現が大きく異なってくる。

いつもいつも同じような撮り方をする人と、そうでなくてその度に全く違うものを撮る人とがある。そのように同じように撮ると言うことは力が揃っているということもあるのだが、違うものを撮ると言うことは、いろんな表現力を持っていると言え、人によってそれぞれ長短・特長があって、それを上手に生かさねばならない。

こうしてみると、やはり上位入賞者は、自分の表現というものを確立している。富士山一山についても、自分がどのように富士山を考え、富士山に対し、どうして表現するかというものを考えている。

普通にただ撮っている、良いものを撮っても代わり映えしないというのは、被写体に対する思い込みがないということになる。ただきれいに撮りたい、良く撮りたいというだけになる。それを自分のものとして、富士山が自分の富士山だというのが撮れるようになるのが、カメラマンとしての使命であり、義務である。

個性を出して撮ると言うことは非常に難しいことであり、プロになろうとしても、何年やってもプロに成れない人は成れない。しかし、つい1、2年で成る人もある。それで一旦消えてしまう人もいるし、そうでない人もいる。表現には、そういう難しさがある。

そういう中でも、入賞者たちは、それぞれ熱心に取り組み、熱心に取り組んでいるからこそ、それぞれに苦勞している。今回はこういうものを撮る、ああいうものを撮ると言うことを考えて撮っていることが伺える。

ただ同じようなものをいつまでも追いかけているような人もある。その時々条件を活かして、自分自身のもので撮る人もある。今回の最優秀賞の作品などは後者であり、その点が強く出ている。

平成29年2月 審査員長 白 簾 史 朗